



Contents

P1.2	巻頭インタビュー パラリンピック、これからの日本における役割とは？
P3	キャンパスの声/CSRインターンシッププログラム基礎講座紹介
P4.5	座談会 地方議員が語る「本研究科で学ぶ意義」
P6	21世紀社会デザイン研究科 公開講演会開催
P7	第1回 21世紀社会デザイン研究学会 年次大会開催
P8	修了生紹介

Vol.8

発行：立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集責任：笠原清志
編集長：進士多佳子
発行日：2007年4月1日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



日本初！ 〈社会組織〉〈非営利組織〉〈危機管理〉 3つの分野を学べる大学院

●巻頭インタビュー●

パラリンピック、これからの日本における役割とは？

日本パラリンピック委員会運営委員・アルペンスキーゴールドメダリスト 大日方 邦子 さん

スポーツはフェア&オール

日本代表として、パラリンピックへの出場は今回で4回目、選手としてかかわってきていかがでしたか？

「この12年で、パラリンピックは知名度が上がるのと同時に、役割が大きく変わってきています。パラリンピックのあり方も、考え直す必要があるのではないかと思うようになりました。」

「「障害者スポーツ」を「一般のスポーツ」と分けて考えられる傾向が、日本ではあります。本来、スポーツはフェア&オールなものです。身体を動かし、競技を楽しみたいと願う気持ちは、「障害者」でも「健常者」でも同じです。でも日本の社会では、例えば「健常者」から「障害者」になると、一人の人間としての個性より、「障害者であること」がまずクローズアップされる傾向があるのは否めません。このことを、パラリンピックのあり方を通して、考え直してみることは意味があるのではないのでしょうか。」

原点に立ち返ることはスポーツでも社会でも大切

大日方さんの取り組まれているチェアスキーとは、どのような競技なのですか？

「座った状態で滑れるスキーと考えてください。スキー板

は1本、つまり立って滑る場合の片足分を使います。“スキーは2本の板を使う”という常識を覆し、1本の板を使うことにしたことで、バランス力が試されるスポーツであるアルペンスキー本来の醍醐味が得られるようになり、競技として誕生、進化していったのです。足を使わなくてもスキーができる、と考えたチェアスキーの初期開発者たちの発想力はとてもすばらしいものだと思います。」

「子どもの頃、年齢が違う子ども同士と一緒に遊ぶとき、ルールを少し変えて、皆が楽しめる工夫をしましたよね。障害のある人のスポーツも、ルールと用具の工夫により、不可能とされていたことを可能にしてきた点では同じです。そして社会もまた同じです。既成概念を取り払い、設備や製品を新たに作り出すことで、多様性を持つ「個人」を認め合い、皆が住みやすい社会になるはずですが、でも実際にはなかなか難しい。これは多くの場面で、既存の枠組みがプレッシャーになっているからでしょう。誰のための社会なのか、原点に立ち返って考え直すことが大切だと思います。」



◆おびなた・くにこ プロフィール

1972年東京生まれ 3歳のとき交通事故で右足を失い、左足にも障害を負う。中央大学法学部法律学科卒業後、日本放送協会（NHK）入局。現在、制作局 学校教育番組ディレクター。
日本パラリンピック委員会 運営委員
日本パラリンピアンズ協会 副会長

個性を尊重して、多様性を認めること

大日方さんの著書には、小学校～中学時代を通して特別な扱いを受けた体験が綴られていますね。

「最近では統合教育のある学校では、かなり改善がみられるようになって、車いすでの登校は珍しくなくなっています。一方で、連日のように、いじめの問題が報道されています。相手の個性を尊重し、多様性を認めれば、こんなことは続かないと思うのですが。」

オリンピックもパラリンピックも原点は同じ

日本でもパラリンピックがずいぶん報道されるようになってきました。しかし、報道が一過性のものであったり、大きなムーブメントにつながっていかない等の問題点もあるようですね。まだまだ特殊扱いなのでしょうか？

「アメリカやヨーロッパでは、パラリンピック報道は、障害者が特別頑張っている活動、としてではなく、競技そのものの面白さに注目が集まります。自然に競技者もまずは競技者として目立つこと、すなわち“勝つ”ことに強くこだわりますし、その過程においては“どれだけ自分らしく生きられるか”を追求して楽しんでいます。」

「義足を隠さずカラフルなペインティングで自分をアピールしている選手が“ふつう”なのです。応援者も競技や演技をピュアなスポーツとして楽しんでいる様子を見ると、オリンピックとパラリンピックが別々に存在していることそのものが不自然なのだということに気が付きます。」

2014年、オリンピックと同時開催も夢ではない

競技としてパラリンピックの扱われ方は、今後どのように変わってくるのでしょうか。

「IOC、IPCの距離は近づいています。2010年のバンクーバーの次、2014年には、オリンピックとパラリンピックの同時開催は、実は夢物語ではなくなっているのです。パラリンピックの競技力は、回を重ねるごとに格段に上がって

いるのですから。積極的に受け入れていく土壌、社会全体が大きな流れを作るような思考になってほしいですね。」

顔の見えるコミュニケーション

企業の社会貢献についても、いろいろなスタイルやメリットがあると思われませんが。

「社会貢献の姿勢は、企業の評判に密接にかかわるはず。たとえばパラリンピックに対するサポートの形もいろいろ考



えられます。競技者一人ひとりに注目していただいても良いのです。競技を続けるためにはサポートが必要です。このような視点で見ると、社会と企業の多様なコミュニケーションの形が見えてくると思います。企業の特性や考え方に応じて“顔”が見えるタイアップも可能です。社会と企業の距離の近さを感じさせる明快な活動、それは、社会貢献のリーダーシップを取っていくことにもつながる、強力な企業の広報だと考えています。」

最後に、大日方さんの考える“21世紀の社会デザイン”についてお聞かせ下さい。

「さまざまな立場の人が、柔軟な発想で話し合っていくことが大切です。個性を尊重すること、そして“顔”が見えること。これが21世紀の社会のコミュニケーションを創り上げていくのだと思います。」

◆著書紹介

壁なんて破れる

—パラリンピック金メダリストの挑戦

大日方 邦子 (著)

日本放送出版協会 (2006/06) ¥1,470 (税込)



3歳のときの大事故、中学校でのいじめ、そしてスキーとの出会い。冬季パラリンピックで活躍中のトップ・アスリートが熱く語る、スポーツにかける思い、仕事、結婚、そして社会へのメッセージ。

◆スキー歴

スキーを始めたのは高校2年。輝かしい軌跡は次の通り。

1994年、第1回ジャパンパラリンピック冬季大会で大回転1位。冬季パラリンピックは、初参加のリレハンメル大会で滑降5位。以降、国内外を問わず大きな大会で常に上位を維持している。

1995：ジャパンパラリンピック冬季大会	〈大回転1位 回転1位〉
1996：Newzealand Disabled Ski Championships	〈スーパー大回転3位 回転1位〉
1998：冬季パラリンピック長野大会	〈滑降1位 スーパー大回転2位 大回転3位〉
2006：障害者スキーワールドカップ	〈種目別回転1位 大回転2位 総合2位〉
2006：冬季パラリンピック・トリノ大会	〈滑降2位 スーパー大回転2位 大回転1位〉
2007：障害者スキーワールドカップ北米シリーズ	〈回転1位、大回転2位〉

◆今期参加の大会

【2006/2007シーズン活動予定】

2006年10月22日～11月 6日	ヨーロッパ合宿 (Soelden@AUT)
2006年11月26日～12月11日	北米合宿 (Panorama@CAN)
2007年 1月10日～21日	ワールドカップ (Aspen@USA)
2007年 1月22日～27日	ワールドカップ (Kimberly@CAN)
2007年 2月 1日～ 4日	ジャパンパラリンピック (白馬八方尾根)
2007年 2月 5日～ 8日	高速系合宿 (白馬八方尾根)
2007年 2月10日～16日	極東カップ (Yong Pyong@韓国)
2007年 2月22日～24日	全国身体障害者スキー大会 (片品)
2007年 2月27日～3月 9日	ワールドカップ (Abtenau@AUT)
2007年 3月10日～18日	ワールドカップ (Zoncolan@ITA)



可野 倫子 さん

4 期

21世紀社会デザイン研究科との出会いは仕事の資料作成中のインターネットへの『みちくさ』でした。『社会デザイン』ということばに、何？面白そう！から始まり3ヶ月後には数十年ぶりの学生でした。

フリーの管理栄養士として、「おいしいね！」と言いつける健康な生活と社会をめざし、食をツールにした健康維持促進、予防の仕事をしております。

大学卒業後、民間企業に勤務、その後恩師の声係りで私の時間に合わせて頂ける仕事、つまり家庭に負担がかからない仕事（思えば贅沢な話です）をしてまいりました。管理栄養士という資格ゆえのことでした。恩師の研究補助、メディア、病院、企業にレシビアや健康に関する調査や情報提供をしていくうちに、行政の健康教室に携わったことが縁で、「認知症（当時は痴呆）予防」の研究事業に関わることになりました。「予防」「地域介入」ということばに引かれ5年の歳月が流れました。この事業では多くの方と出会いました。そして、人間の力、「人と共に生きる力」を実感しました。換言するならば、グループダイナミクスと行動変容の体感とでもいうのでしょうか。日々の生活の現象としていくらかでもあることですが、その場で「おや？」「あら？」と感じたとき、先人たちの書によって紐解かれていくときの驚き、そして先人たちがつむいだものとの遭遇にはロマンを感じることがあります。年齢を重ねたからこそその面白さでもあります。この『みちくさ』はお奨めです。

そんな生活も「修士論文」という到達点に向かっていますが、21世紀で得たことは次の『みちくさ』へ楽しみを広げてくれる予感がしております。

記・2006年11月



滝沢 千代里 さん

4 期

関西の広告代理店でCF制作に携わり、都内のプロダクションに呼ばれて上京。コマーシャル企画から、イベント、コピーライティングまで十年近く広告畑で過ごした後、某テーマパークの広告制作部に入社。テーマパークのパンフや劇場の脚本、社長の挨拶文まで書き、自嘲も含め「エブリライター」と称していました。

3年前の春に退職し、立ち止まって足元を見つめ直したとき、忙しく走り続けてきた中では見えなかったたくさん問題が心に浮かびました。その頃にクローズアップされ始めたコンピュータやインターネットと子どもたちの心の問題、母子の支援からつながる福祉、そして知り合った知的障害をもつ人々。この人たちのために私ができることは何？書くこと？代わりに発信すること？コンピュータは悪？いいえ、使い方にもよるでしょう。テーマは決まった。知ることから始めよう。

そんな時、ネット上で見つけたのが「21世紀社会デザイン研究科」でした。社会組織とNPOと危機管理、一見バラバラの分野が複合的に存在する大学院。「何ができる？」でなく「何でもできそう」な可能性を感じ、受験したのでした。

ここに来て「アドボカシー」という言葉を初めて知りました。けれど「権利擁護」と言い換えれば、私が目指す方向と重なります。まずは修士論文の作成に向けて、いろいろ吸収しながらテーマを追求しています。昨年の5月から知的障害をもつ人々とコンピュータを使った試みも始めました。この前の秋からは出版社の仕事も動き出しました。三つも四つもの人生を一度に体験しているような忙しさですが、とても充実した幸せを感じております。



矢澤 誠弘 さん

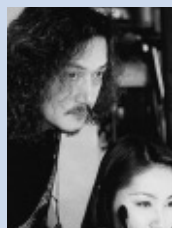
5 期

ヨロブン アンニョンハセヨ!! 5期生の「白衣の墮天使」こと矢澤誠弘です。2006年3月まで、帝京大学大学院文学研究科：二村研究室で日韓関係史を専攻しこれまで、「日本軍慰安婦」「日韓NGO論」、あと趣味で「中国道教教団」の論文を書きました。

また、学部3年次の2002年より、東アジアの青少年の歴史・文化の共通認識育成のための交流事業をプロデュースしている「あじあの芽」という国際NGOに所属しております。

何故、修士修了後にあえて21世紀社会デザイン研究科に進学しようと考えたのかといえますと、2004年度より「あじあの芽」代表に就任し、NGO団体代表の立場から日韓問題の「解決」にむけてのファーストステップである「緩和」の形を考察していきたいと考えたからです。NGOセクターが主体となり植民地期の被害当事者の主張や要求を反映した「緩和」は可能なのか研究課題です。マーク・カプリオ教授の下で、デスクワークとフィールドワークを両立させた研究に取り組んでおります。本研究科は、多種多様な経験をお持ちの社会人学生が多く、若輩者の私は、多くの「先生」に囲まれているような気分です。かといって、堅苦しくなく、毎日の登校が楽しみです。

学外での活動としては、日韓合同授業研究会、帝京国際文化学会、現代韓国朝鮮学会、旧日本軍性奴隷問題の解決を求める全国同時企画「消せない記憶」神奈川実行委員会に所属をしています。



渡邊 正人 さん

5 期

以前化粧品会社の美容研究所在職中、多くの方々のメイクアップ指導やキャンペーンガールから一躍女優に転じたM.Nさんのメイクアップを手掛けてまいりました。また2003年には毎年フランスで開催される「美容の祭典」世界大会においてデモンストラーターをも務めました。現在は、化粧品及び美容業界に長年携わってきた知識や経験を生かし、教育及びコンサルティング会社を設立しています。今でもメイクアップアーティストとして活動しています。

昨年初、立教大学大学院「21世紀社会デザイン研究科」に入学して、早いもので前学期、後学期が終了し、一年になります。新学期を前に学習意欲を駆り立てているところです。

入学したきっかけは、8年前母が脳溢血で倒れ、身体障害者と認定されて以来介護認定や施設の入所手続きの難しさなど、日本の縦割り行政の対応に矛盾を感じておりました。

この実態が日本の社会の現実と諦めるのではなく、私の心の中に社会貢献と言う使命感が徐々に芽生えてまいりました。

一人の力には限りがあり、無力に等しいかもしれませんが、少しでも多くの方が賛同することにより大きな原動力になると確信しています。

21世紀社会デザイン研究科には、社会組織におけるMBAという他に類の無い新しい学びがありました。

この社会組織を学ぶことが、高齢者問題を研究する上で我々の身近な問題として提議出来ると考えています。

今では大学院で学ぶことが生活の一部になっています。

CSRインターンシッププログラム基礎講座紹介

本講座は、文科省の高度人材育成プランに選ばれた「CSRインターンシッププログラム」の基礎講座であり、CSRインターンシップや2年次のCSRインターンシップ集中演習1・2への橋渡しの役割をもつ演習になります。ただし、インターンシップへの参加をしなくても、CSRをテーマにしている人、興味がある人、他研究科の学生なども受講したりと、フレキシブルに多様なバックグラウンドからの議論が交わされております。

CSRは非常に幅の広い大きなテーマであります。決まった定義など存在せず、100人いれば100通りの考え方が存在します。また、企業の特性によって求められる社会的責任やその取り組み方も千差万別です。そのため両先生が持つ多様な人脈から多数のゲストスピーカーを招き、実際に活動している人（企業のCSR担当者、起業された方、個人で活動されている方など）の生の声を聞く機会が重視されています。

ゲストスピーカーの方も教室へお招きするだけに留まらず、時には実際の職場に出かけていきその雰囲気を感じながら議論をしたり、授業後場所をかねてお酒を交えたりなど、多様な？授業スタイルで深い議論を目指しています。

両先生やゲストスピーカーの皆様とは授業だけでなく、今後とも情報交換など長い付き合いができればと考えております。

【ゲストスピーカーリスト】(敬称略)

CSRインターンシップ基礎演習1 (由良先生)

- ・竹原正篤：日本マイクロソフト株式会社 法務・政策企画統括本部 政策企画本部 社会貢献部 部長
- ・筑紫透：株式会社ゼネラルプレス サステナビリティ・コミュニケーション事業部 主任研究員
- ・大和田順子：LOHASプロデューサー、消費生活アドバイザー、環境カウンセラー
- ・春野真徳：株式会社スプリングフィールド 代表取締役

CSRインターンシップ基礎演習2 (服部先生)

- ・真島兼隆：ヌサ・テングラ・マイニング株式会社 顧問
- ・鈴木均：日本電気株式会社 (NEC) CSR推進本部 CSR推進企画室長 兼 社会貢献室長
- ・遠藤直見：日本電気株式会社 (NEC) CSR推進本部 CSR推進企画室 エキスパート
- ・古宮正章：日本政策投資銀行 政策企画部長
- ・半谷栄寿：東京電力株式会社 新規事業開発部部長 (環境NPOオフィス町内会 事務局代表)
- ・赤羽真紀子：日興アセットマネジメント株式会社 CSR室長

(報告者)

- 熊谷孔治：バラマウントベッド株式会社 総務部 法務課

座談会

地方議員が語る 「本研究科で学ぶ意義」

議員になったきっかけ

川田 本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。最初は、皆さんに何故議員になられたかを含め自己紹介いただけますでしょうか。

小林 私は、保険会社の営業を6年間経験しており、阪神淡路大震災時の地震保険の付保状況に疑問を感じました。その後、地震共済制度などの勉強会に参加したことをきっかけに、会社を退職し国会議員の秘書となりました。人とまちの可能性を広げる役割を果たしたいとの思いが徐々に高まり、豊島区区議会議員に立候補し、平成11年当選しました。現在2期目です。

佐藤 私は、子育て真っ最中の頃に、チェルノブイリの原発事故がありました。食べものの安全性がクローズアップされた時期でもあり、生活に密着したこのような問題に憤りを覚え、非核条例に原発を加えるべきと「陳情」を中野区議会に提出しました。一方、痴呆性高齢者の問題でボランティア活動をしており、議会の傍聴を続けておりましたが、傍聴して感じたことは、開かれた議会ではあったものの生活感覚のある議員が非常に少ないということでした。これではいけない、誰かを立てなければと思ったところ、自分自身が議員へ

の立候補を決断することになり無所属として、初めての当選でした。現在、4期目です。

水谷 議員活動は1期目で、昨年3月に本科を修了しました。議員になったきっかけは、子育てしながら仕事をしておりましたが、豊島区の学校給食の民間委託化やごみ問題について話題になった時に、議会を傍聴したところ、佐藤さんと同じように、議会には生活感のある人がいない感じがしたからです。子育てや介護など生活に身近な問題に対して、不便さの経験をしてこなかった人が議論してもわからないのではと思い、立候補を決断しました。

斎藤 私のきっかけは人との出会いです。マスコミの仕事をしていたことから小中学生向けに講演の依頼を受け、その後、その関係者より立候補してみないかと声がかかりました。戸田市は、市民の平均年齢が37歳の流動性の多い、若いまちです。当時、戸田市議会には28人中女性議員は僅か2人。私は地元出身ではなく、知り合いもおらず、自分に何ができるのかとても悩みましたが、政治がもっと身近に感じるような情報発信者としての役割があるのではと思い、挑戦することを決断。現在に至っています。

住民と行政をつなぐ

川田 みなさん、それぞれ様々なきっかけが

あったのです。今、「発信」という言葉が出てきましたが、いろいろな情報を住民に「わかりやすく」「正しく」伝えることが政治の基本であると思います。その点は、皆さんどうお考えですか。

小林 行政から市民への情報の伝達が非常に難しいと感じました。施策の意図するところが噂の先行により、市民に正確に伝わらないまま、行政への不信感に繋がってしまうこともありました。もっと、行政と市民が距離を近くして語り合う場があればと思います。

斎藤 スローガニックなものをピラにして駅で配るのではなく、決定した事実情報をピラにして配ったり、HPを使って情報発信したりしています。特にHPIは「情報サイト」として位置づけました。なぜなら、ほんの数年前まで戸田市の情報を得ようとしても、ほとんど検索できず、困ったことから、同じ思いをしている市民が多いのではと思ったからです。その結果、1日に200~300人くらいのアクセスがありました。

佐藤 私は議会ごとに「うさぎだより」というお便りを出しています。今は、ふつうになってきましたが、16年前に、そういったことをやっていたのは私ぐらいだったので、中学校の副読本として紹介されました。税金の使

い道をオープンにすることは大切なことだと

川村 仁弘 立教大学教授



自治省事務官、滋賀県総務部長、自治省課長等の後、新潟県副知事、自治大学校長等を経て、現職

川田 虎男 氏



21世紀社会デザイン研究科2年
鶴ヶ島市社会福祉協議会職員を経て現在地方政治に関心のある政党委員。
研究テーマ：社会福祉協議会とNPOの協働についての研究（仮）

水谷 泉 氏



21世紀社会デザイン研究科2006年3月修了
食の安全や環境問題に取り組む市民活動を経て、2003年より豊島区議、現在1期目
研究テーマ：生活情報のネットワーク化と行政の役割—東京の「少子化」対策と子育て支援を事例に

思います。

水谷 同じ議員でも情報の得られ方が違いますね。少数会派ということで、議会の情報でもなかなか得られないことがあります。また、与党、野党の立場でも違いますし、不透明な部分も多いのも事実です。少ない情報の中で、HP等を使って、事実を伝えていきます。

川田 議員には、議員から住民への発信と同時に住民の意見を吸い上げていく役割もあると思いますが、その点はどうですか。

佐藤 非核条約や高齢者のデイサービスなど、議員でなくても、住民としてできることがたくさんあると思います。議員の役割は何かというと、「コミュニティデザイナー」なのかなと思います。地域に関わることで得られた情報を、例えば、地域の中にこういったことに積極的な人がいるということ、行政の考えと結びつけて、何をしたいのかを提示することではないでしょうか。

斎藤・水谷 同感！

小林 困っている人の生の声を聞いてニーズを掴むことが必要です。そして、それを行政と結びますね。

川村先生 住民と行政をつなぐとありますが、つなぐとはどういうことなのでしょう。住民参加のワークショップなどを設けて「生の声」を聞く。しかし、これが議会で生かされているのか疑問もあります。「議会内容の充実」というところに議員の役割があるでしょう。住民参加のしかけづくりに、議員がしっかり声をあげていかなくてははいけない。しかし、なかなか上手くいかない。厳しい現実をなんとかしていかんだという「気力」と「根性」が政治家というものかなと思います。

水谷 忍耐力も必要です（笑）。

ちよく暮らせる社会について考えたいと思いました。また、この学科はいろいろな要素を学べることから、広く勉強できることがいいですね。

小林 私は議員の役割は、「つくり出す」と同時にきちんとチェックすることも大切だと思います。これまでのやり方をチェックしてライフスタイルに合ったしくみに修正していくためには、理論的に学ぶことが必要だと感じました。

斎藤 私は2期目に入り、1期目の自分を振り返る時期でした。まちづくりに住民が積極的に関わっていくことの楽しさを伝えたいが、理論がない。様々なしくみについてもっと勉強しなくてはならないと思いました。この研究科を選んだのは、「危機管理」「ネットワーク」「NPO」のキーワードに目を引かれたからです。文化で人と人をつなげていくことをテーマに政策研究しています。

水谷 市民活動を長くやっていて、自分の中で理論的に学びたいと思ったことがきっかけです。また、家から大学が徒歩で10分かならないということも大きなポイントですね。入学願書を出したのは、議員になって半年経ったところで、これから議会での生活がどうなっていくのかはまったくわからない状況でした。それから半年経って入学したのですが、既に初めての議会活動でボロボロになっていて、いくら近いとはいえ、通い続けられるのか、不安でした。

川田 ここで学んだことが活かされたことはどんなことですか。

水谷 まず学校が楽しいですね。自分のお金で通っていますから、できるだけ吸収したいと積極的になりますね。先生や友人とのディスカッションから、自分では考えも及ばない意見が出たりして、自分の幅が広がったように思います。

佐藤 1年生のときはとても楽しかったです（笑）。講義で紹介されたことと同じようなことを実践の場で経験したとき、次回の議会ではこれを質問しようと思んだことがあります。議員こそ、理論と実践を両立できる職業でないでしょうか。ただ、多くの文献や資料を開いても、なかなか読みきれないことがネック

です。仕事の都合上、講義にでられないことがありましたが、とてももったいないことだと思いました。

小林 確かに学校は楽しいですね。もっとじっくり勉強したいとも思います。講義を受けるほど、現場でやりたいことが増えていくんです。

斎藤 大学のイチョウの木を見ると気持ちを切り替えられます。大学に来て本当によかったと思います。分かったような気で使っていた言葉が、実は曖昧で言葉の定義を理解していなかったのだなと反省することしきりです。講義を受ける中で、すべては、政治につながっている、政治は身近なものなんだと改めて感じることができ、自分の活動と照らし合わせて考えることが出来ます。

川村先生 皆さんが議員になられた契機も様々なですね。議員の役割は、住民や地域の中から現れてくる問題を議会の中でとり上げ政策化していくことです。住民の生の声をどのように聞いていくのか、と同時に、どのように一緒に地域をつくっていくのかを考えることが大事です。この研究科は社会人が7割です。実際現場で身に付けた知恵や経験により判断していたことを、改めて大学で学び、今までと違う視点で考えてみるができると思います。ものごとの根っここのところを考えて、自分のものにしていけば、一皮向けて卒業していけると思います。地方議員は、これからの地方を考える上で重要な役割を担ってくると思います。「住民の意思が区（市）政に生きること」「住民の抱えている問題が区（市）政で改善されること」「様々なアクターが協働して取り組むことを考えること」。地方議員がやらずにこの3つの事は成り立ちません。本研究科のよいところは、様々なネットワークを持つ人々が集まっているので、これらのネットワークを通じ議論し、知識と人脈を培うことが出来ることです。そして、現代社会を動かしている流れを探る目が養えることだと思います。皆さんのこれからの活躍を期待しています。

〈2006年11月現在〉

本科との出会い・本科で学んだことが生かされたこと

川田 ところで、皆さんはなぜ本科で学ぼうと思われたのですか。

佐藤 社会保障の仕組みを知りたいと思いました。子どもを持つ親や高齢者は口々に「自分で自分たちには手薄なのか」と住民サービスに不満をもらします。全体として誰もが気持

佐藤 浩子 氏



21世紀社会デザイン研究科2年
塾講師等を経て1991年より中野区議。現在4期目。2007年3月本科修了予定。
研究テーマ：自治体政策にコミュニティデザイン力を一中野区障害者移動支援政策の事例から

小林 俊史 氏



21世紀社会デザイン研究科1年
損保会社の営業マンを経て1999年より豊島区議、現在2期目
研究テーマ：地域社会での公益活動を促進するコーディネーターに必要な技能と育成方法について

斎藤 直子 氏



21世紀社会デザイン研究科1年
フリーアナウンサー。2001年より戸田市議、現在2期目
研究テーマ：まちづくりの重要政策として音楽を中心とした芸術文化政策を考える研究

21世紀社会デザイン研究科 公開講演会開催

■ 団塊の世代が参画する 地域創造の可能性

～コミュニティデザインへの新たな視点～

2006年11月15日、立教大学池袋キャンパスにて「団塊の世代が参画する地域創造の可能性～コミュニティデザインへの新たな視点～」をテーマにした公開講演会が開催されました。本研究科の高橋紘士教授より、前段として、団塊世代の大量退職時代といわれる、いわゆる2007年問題に直面して、地域社会はこれら世代のポテンシャルをどう生かしていくのかと問題提起があり、これを受け、福嶋浩彦（千葉県我孫子市長）、田中尚輝（(社)長寿社会文化協会常務理事）の両パネラーより、「我孫子市の提案型公共サービス提案制度」並びに「団塊シニアの街づくり戦略」について発表がありました。

団塊世代が定年を迎え、税収面からも市民は社会サービスを消費側から担い手になる必要があること、また、団塊の世代がもつ変革のパワーをどうしかけるかが重要であることなど、団塊世代への期待が高まっています。一方、利益や効率化が最優先である「会社」の価値観とは全く異なる、「地域社会」の価値観に自己変革しなくては、今まで主に女性たちが担ってきた細やかな地域社会のサポートを破壊してしまう恐れがあることを強調されていました。老若男女、多様な価値観や考えを持つ個人々人をインテグレートさせた社会を、自らが問い、担うことが、高齢化を迎えるこれからの社会に重要な視点であるとの示唆に、非常に活発なディスカッションが行われ、会場は熱気に包まれていました。（報告 北原正代）

■ 社会的企業が拓く サードセクターの新しい地平

～イタリア・トレントの
社会的協同組合の経験から～

2006年12月2日、立教大学池袋キャンパスにて、イタリア出身のボルザガ氏による「社会的企業が拓くサードセクターの新しい地平～イタリア・トレントの社会的協同組合の経験から～」をテーマにした講演会が開催されました。それによると、1980年代まではイタリアでも日本と同じように、社会福祉サービスは行政が行うものだという認識が一般的でしたが、1991年に成立した法律・第381号により社会協同組合を始めとする第3セクターやそれらを含めた社会貢献活動に寄与する社会的企業は制度的に大きく発展し、今日のような社会サービスの民間化に繋がっていったのです。

イタリアと日本という点、土地柄や風土、文化、歴史など全く異なる点も多いのですが、グローバリゼーションによって世界が同時に変化を受けるような現代では、より良いモデルケースを見つけ出すことこそがまず求められているように思います。講演会の最後にボルザガ氏は、今後更に社会的企業が発展をするためには、コミュニティへの関心と組織の民主的運営・参加および経済的透明性の担保を強調されていました。このことは、あらゆるサービスの民間化を推し進めている現在の日本社会への重要な問いかけであると同時に、私たち一人一人がそれぞれ所属するコミュニティや組織への関心の再認識を実感し、非常に有意義な時間であったことに深く感謝する所存となりました。（報告 大塚理佐）



第1回 21世紀社会デザイン研究学会 年次大会開催

分科会 (午前の部)

第1回21世紀社会デザイン研究学会年次大会のテーマ別分科会が、午前の部で開かれました。「CSRと市民の期待」、「コミュニティ・デザインの実践と課題」、「グローバリゼーションと市民社会組織の役割」、「大都市災害への備えとコミュニティ」の4テーマの分科会が池袋キャンパス7号館において同時進行で行われ、12名が日頃の研究成果を発表しました。

「CSRと市民の期待」の分科会においては、スコット・デヴィス本学教授が司会を進行し、岸本幸子パブリックリソースセンター理事がコメンテーターを務め、発表者である神田敏子氏、新谷大輔氏、山極清子氏の発表がありました。また、「コミュニティ・デザインの実践と課題」の分科会では、司会を萩原なつ子本研究科助教授が務め、コメンテーターである加藤薫21世紀社会デザインセンター理事長が、齋木勝好氏、佐藤浩子氏、村田あが氏の発表に対し論評しました。伊藤道雄本研究科教授が司会、赤石和則拓殖大学教授がコメンテーターを務めた「グローバリゼーションと市民社会組織の役割」の分科会では、五月女光弘氏、高橋清貴氏、内田聖子氏が研究発表。「大都市災害への備えとコミュニティ」をテーマとする分科会では、司会を川村仁弘本研究科教授が、コメンテーターを大津康祐東京消防庁防災特別指導員が務め、古池佳子氏、澤野次郎氏、金谷祐弘氏が発表しました。

発表者は、本研究科そして本学会の特色を表すように、様々な分野で活躍する多種多様な方々、行政官、区議会議員、他大学の教員、NPOやNGOで働く人、会社員などで、参加者との活発な質疑応答がありました。今回は第1回ということでしたが、次回は学会員も増え、ますます自由活発な議論が期待されます。(真田尚剛)

パネルディスカッション (午後の部)

統一テーマを「21世紀の社会デザインを考える」と掲げ、多様な問題提起により議論されました。

コーディネーターを本学会会長北山晴一教授が務め、総務省消防庁消防大学校消防センター所長の室崎益輝氏より「安全で安心できる社会を目指して」、北海道大学公共政策大学院教授の宮本太郎氏より「21世紀型福祉ガバナンスのデザイン」、みずほコーポレート銀行顧問の藤井威氏より「豊かな生活実感」についてご講演頂きました。



本学会では、「コミュニティデザイン分野」「CSR (企業の社会的責任) 分野」、「非営利活動 (NPO、NGO、ボランティア活動) 分野」、「危機管理分野」、「国際協力・平和構築・共生学分野」、「都市防災分野」、「文化・芸術組織分野」等、21世紀社会において注目される分野における研究者、実務家、企業関係者等、さまざまな経験を持つ会員が連携、協働による研究活動の場を提供しています。学会員のメリットとして、年次大会参加での研究発表及び討論の他、会報誌、報告、評論、事例紹介等の各種情報が受けられます。何よりも多様な知的ネットワークのさらなる充実につなげていただけます。

◎21世紀社会デザイン研究学会に入会を希望する方は、所定の書類を添えて事務局にお申し込みください。常任理事会の議を経て承認となります。
学会事務局：〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長室 気付 z3000227@grp.rikkyo.ne.jp

受賞しました

■第28回東京ビデオフェスティバル (TOKYO VIDEO FESTIVAL 2006) 優秀作品賞受賞

瀧田 浩子 さん (4期生)

2006年2月18日品川インターシティーホールにて、4期生の瀧田浩子さんが第28回東京ビデオフェスティバルの優秀作品賞を受賞されました。作品は「The factory history～新しい街へ～」という約9分間の映像作品です。瀧田さんは「新たなつながりや出会いが沢山生まれることが一番うれしかったです。今後も意義のある映像作品を作ることにより、何らかの社会貢献ができればと考えています。」とコメントしています。



■平塚らいてう賞奨励賞受賞

菊地 栄 さん (4期生)

人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏の遺志を継承して創設された、第二回平塚らいてう賞奨励賞を本学21世紀社会デザイン研究科2年の菊地栄さん (北山ゼミ) が受賞されました。菊地さんはマタニティ・コーディネーターとして長年出産に関わる活動、研究に携わってこられました。今回の受賞にあたって『長年取り組んできた「出産」に関わる仕事が評価されたことを、うれしく思っております。昨今「出産」はニュースなど各方面でとりあげられる社会的テーマになっており、注目が集まっていることが今回の受賞につながったと思っています』というコメントをいただきました。





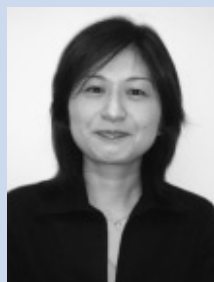
上園 俊樹 さん 1期

経歴と修士論文テーマ
 近畿大学農学部水産学科「日本初の本鮪養殖研究」卒業。
 2004年3月立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。
 (株)西友入社。人事部12年勤務後、
 (株)セキュリティ設立、代表取締役
 (社)全国警備業協会法制審議委員
 (社)埼玉県警備業協会副会長・教育委員長
 所沢警備業関係防犯連絡協議会会長
 21世紀社会デザイン学会常任理事
 修士論文テーマは「地域社会における危機管理の未来像
 ～21世紀社会に対応した警備法制を中心にして」

私が研究科入学の年に、(社)全国警備業協会の推薦により審議委員として、「警備業法の改正」に関わる事となりました。従って、私の研究報告書が警察庁と協会で構成する、法制審議会の基礎資料となったわけです。

警備業は、高齢者や学童の保護、環境の破壊につながる行為、又、国防、刑務、防災に付随した付帯業務等、拡大の一途をたどっております。需要に応える為、監視システムのIT化他、高度化を図っていますが、それらは業務推進上の手段であり、人間と同レベルの高度な行動、知覚作用が出来ない限り、融合の問題とはなりえません。むしろ行政や市民、NPO/NGOをはじめ、21世紀の新しい公共性を担う、非営利組織等との調和のとれた防犯面での融合が、将来的課題となります。又、業務の高度化に合わせ、優れた人材の育成が、求められております。特に新法では「積極的な情報開示」「誠実な顧客対応」等が条例にうたわれており、CSR(企業の社会的責任)の推進人材の育成が、急務となっております。

警備業は「社会的責任」を体現するビジネスであり、「安全・安心」の提供という本来業務を、誠実に行う事がCSRの出発点といえます。当研究科では新たにCSRインターンシップ・プログラムが、文部科学省委託事業として開始されますので、我々業界としても本プログラムに参加し、連携を図って参りたいと思います。私の院生生活は超多忙ではありましたが、充実した2年間を送らせていただきました。



渡邊 浩美 さん 2期

経歴と修士論文テーマ
 西南学院大学文学部国際文化学科卒業。2005年3月立教大学21世紀社会デザイン研究科修了。
 (株)ミキハウスに6年間勤務した後、1995年、当時熊本
 市で創設されたばかりのスペシャルオリンピックス日本
 に勤務することになり、SO活動を通じ、知的障害のある
 人たちが、そしてNPOと出会う。2001年からは東京勤務
 となり、主にファンドレイジングを中心とした渉外を担
 当している。修士論文テーマは「障害者スポーツの社会的
 可能性―共生社会への架け橋となる知的障害者スポーツ活
 動の考察―」

私が仕事として従事し、また研究テーマのモチーフとなっているのが、スペシャルオリンピックス(SO/エスオー)というNPO活動です。オリンピック、パラリンピックと並び、「第三のオリンピック」と称されることも多いのですが、創設者であるユニス・ケネディ・シュライバーがSOを始めた起源は1962年とされていますので、パラリンピックとほぼ同じ歴史をもつしょうがい者スポーツの草分け的な存在です。その特徴は、知的しょうがいのある人たちが、地域の中で継続的にスポーツ参加ができるプログラムを実施していることにありますが、SO活動は多くの市民ボランティアに支えられており、また、機会均等と完全参加を具現化したその競技会形式も大変ユニークであり、画期的なものです。

大学院在学中の2005年、SO冬季世界大会が長野県で開催され大会は無事成功しました。長野パラリンピックほどの社会的なインパクトは与えられなかったかもしれませんが、大会終了後、着実にSO活動は普及し、現在、45の都道府県にまで広がっておりますし、組織としても、2006年7月、「認定NPO」の認定を受けることができました。行政主導であったしょうがい者支援のあり方に一石を投げ、市民活動として実践しているSOは、既存のスポーツ活動の概念や枠を超え、知的しょうがいのある人たちはもちろん、多様な人々をエンパワーする活動であるといえます。私は研究科での学びと論文作成により、仕事だけでは気づくことのできなかったSOの有益性を検証し実感することができましたが、今後も実践の場を生かした研究を続けていきたいと思っています。

講演会 (池袋キャンパス)

4月16日(月)

東アジアにおける平和の構築

～日韓、日中関係からのアプローチ～

講師：孫 新(中国社会科学院日本研究所副所長)
 李 鍾元(立教大学法学部教授)

コメンテータ：野村浩一(本学名誉教授)

司会：秋山昌廣(本研究科教授)

5月19日(土)

未踏少子高齢社会の将来

～21世紀社会デザインの基盤を問う～

講師：高橋重郷(国立社会保障人口問題研究所副所長)

松谷明彦(政策研究大学院大学教授)

藻谷浩介(日本政策投資銀行参事役)

コメンテータ：北山晴一(本研究科教授)

2007 前期スケジュール

4月 4日(水)	18:30～入学式 20:10～懇親会
4月 5日(木)	履修相談 18:30～20:30 <前期・後期課程 1年次>
4月 5日(木)	CSRインターンシップ ガイダンス 20:30～21:30 <前期課程 1年次>
4月7日(土)～12日(木)	履修届(A)受付 7日(土)10:00～17:00 9日(月)～12日(木)12:00～20:30
4月11日(水)	前期授業開始
4月17日(火)	登録科目確認表配布(郵送)
4月19日(木)	履修変更届受付 4月19日(木)・20日(金) 12:00～20:30 4月21日(土)10:00～17:00
4月24日(火)	登録変更確認表配付(郵送)
4月26日(木)	変更内容確認期間 4月26日(木)・27日(金)12:00～20:30 4月28日(土)10:00～17:00
7月12日(木)	前期授業終了
7月13日(金)	補講期間開始(7月13日～7月17日)
7月14日(土)	◆進学相談会
7月18日(水)	前期末試験開始(7月18日～7月31日)
8月 1日(水)	夏季休業開始(8月1日～9月19日)

2007年4月

**研究科に博士課程後期課程が
設置されました。**

詳細は研究科HPおよび下記をご覧ください。

立教大学大学院〈入学センター〉

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL.03-3985-2447 <http://www.rikkyo.ac.jp>



今号の編集スタッフ

笠原清志(編集責任者)

進士多佳子 平田賢典

斎藤直子 竹内恵里子

石井さやか 大塚理佐

北原正代 真田尚剛

矢澤誠弘 武藤心平

渡邊正人

21世紀社会デザインセンター